
一部50円です



風

あかん！糸が切れる。強い風をうけて勢いよくあがったやっこ凧は手足をバタつかせて左右にゆれている。凧糸だけでは足りないと思い、母親の裁縫箱から太めの木綿糸を持ち出し継ぎ足していたからなおさらである。しかも糸巻が空になって、今にも持っていられそうな糸の張りだ。たこ足につけた二本の細長い新聞紙も切れそうだ。糸をくりつけたかまぼこ板を両手で握り風が弱まるのを待つが、高く舞いあがった凧は風が弱くなるまでおろせそうにない。

糸が切れれば遠くの山へ飛んでいきそうな風の強さだ。バタついている新聞紙のたこ足が切れればくるくる回りながら簡単に地面に落ちてしまう。風が少し弱くなったと感じる瞬間があるが、糸を巻き戻せるほどではない。高く遠くへあがりすぎたから、糸を強引に巻けば切れそうな張りつめた感触が手に伝わってくる。

どうすることも出来ずに糸を引っ張りながら凧を見上げると、米粒で継ぎ足し張り付けた凧足の片方が途中から風で吹き飛んでしまいそうた。今まで安定していた凧が急に左右にぐらつきだした。もうあかん！落ちる。私は、少しでも近くに落としたいと思いついばい糸を巻くと凧はくるくると回転しながら、かなり先の田んぼの岸に落ちた。今までぴんと張っていた凧糸も一気にたるんで草むらや雑木の枝にふんわりと落ちてきた。

風が無くても、強すぎても凧は揚げられない。適度な風が吹いていないと高くまでは揚がらない。そんな都合の良い風はめったにない。家の中において退屈すると、ついつい凧を出してきては誰もいない田んぼを駆けずりまわっていたのである。山深い山里で、私はだれも見えていない一人芝居をしていたのだ。(嘉)

死をめぐるあれやこれ 6

石川 吾郎

「良寛」

正月なので、めでたい話題をと探したが、タイトルがタイトルなのでなかなか見つからない。ただ有名な「門松は冥途の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」というのが頭をかすめたのみ(これは一休さんの狂歌だとか)。

これだけではあまりなので、今回はかねがねやってみてなかった『厄除け詩集』のまねごとで、良寛さんの漢詩の訳を試みた。親友の有願老人が説法するのに偶々行き会って作ったという「偈(げ)」。

似欲割狗肉 羊のかんばんで

当陽掛羊頭 犬肉をうりさばく

余亦同臭者 実はワシもご同類

優々卒未休 なにが因果か

止められぬ

なにやらあやしげな雰囲気。このコラムそのものも思わせる。またこの「芥川だより」の編集者と小生の関係も連想させる。さらに谷川俊太郎の「鳥羽」という詩の中の一節、

「本当のことを云おうか／詩人のふりはしているが／私は詩人ではない」というのまで思い出しました。

正月から怪しげなことになったが、今年もよろしく願います。

巻頭エッセイ	1	下村嘉明
死をめぐるあれやこれ	6	石川吾郎
闘病記 22	2	梵店主
おっちゃんこちょいぼけ 22	3	A O
こころの診察室 15	4	伊藤明
世界一周旅行記 8	5	若山哲郎
大人の今昔物語 6	7	石川吾郎
素老人・よもだ帳 10	8	坂本一光
哲学屋のつづやき 7	9	祖蔵哲
一對十五からの起死回生	11	大江雉兎
B級サラリーマン渡世譚 20	12	明石幸次郎
『投稿小説』消える	13	古城悠
女 90年の軌跡	18	眞糰
俳句	18	土田裕
編集後記	18	下村嘉明

梵店主

迷走の世界

髪の毛を後ろに束ね粋なジャケットを着て、海外旅行に出かけるような大きなスーツケースを手で引きながら新しい患者が、よっちゃんの隣に入院してきた。年頃は七〇歳をゆうに超えているように

思える。

この爺様は、看護師にベッドを案内されるや直ぐに、周りのベッドを回りながら「今度入院してきた青木です。よろしく」と顔とは似合わない張りのある声で挨拶をした。これまで幾人かが入院してきたが、爺様のように入院早々、大きな声で言うものはいなかった。

誰かが入院してきても、カーテンで仕切られているために、声は聞こえるのだが隣にどんな人がいるのかわからなかった。顔を会わすのは、食事の時に廊下へ取りに行く配膳の時ぐらいだが、すれ違う程度で、ほとんど顔を見なかったからだ。

しかし、芦屋の爺様が入院してきてから、病室の雰囲気が変わった。黄門様のような雰囲気は漂わせながら、太く甲高い声で話をする。まわりの患者たちは迷惑がるかと思つたが、嫌みのない、少しボケたような素朴な振る舞いに、世間知らずの爺様だと容認している様子であった。

彼は、何事にも一言を添える。たとえ一人であつても、必ず何かしら独り言を言う。その発音が少しばかり可笑しくて笑いを誘う。風貌と相まって際立つた個性を感じさせた。

よっちゃんは、少しも臆することがない。爺様に興味を感じた。この大学病院に入院してくる人は裕福な人が多いと、掃除のおばちゃんが言っ

ていたのを思い出した。確かに病棟を行き来する見舞い客もそれなりの格好をしている。個室の病室も多い。特別室も一つある。一日二万余りだという。有名人やお金持ちが入るのだろう。看護師の話では、ある社長が特別室に入院していた時、病室は贈られてきた花がいっぱいできいな新地のママが詰めていたとか。

しかし、特別室といえども個室同様に監視カメラで常時見られているから、プライベートはない。

特別室の入院患者は、おおむね短期入院の人が多いらしい。

よっちゃんは、芦屋の爺様がどうして個室に行かなかつたのか不思議に思った。談話室でテレビを見ている爺様の側に行き、話しかけた。

「どこが悪のです？」

「糖尿がすすんで、医者に入院しますか、と言われたもんで。」

「永いんですか、糖尿は？」

「ええ、一〇年あまりになります。インシュリンの注射も毎日のように打つてます」

よっちゃんは、糖尿患者が毎日、自分でお腹にインシュリンを注射しているのを知っていた。

一度、糖尿病になれば治らないと聞いていたから、食への楽しみが減って可哀そうだと思っていたが、この爺様は、自慢げに話した。

「自分は、食品卸をやっていた親父が残

した遺産を管理していて、兄弟に毎月、配当をしている。親父のおかげで不自由のない生活をしてきた。

普段は、家内が糖尿病食を作ってくれて厳しく言うから規則正しい生活をしているが、度々いく船旅では、家内も許してくれるので飲み放題食べ放題になってしまう。これが悪い。」

確かに、目の前に美味しそうな物が満ち溢れているクルージングで食べるなど、言うのは酷だろうな。

金持ち故の苦しみなのだろう。美味しい物をたくさん食って、身体を動かさなかつたら糖尿になつてもおかしくはない。世の中の金持ちは、古今東西、糖尿病の恐怖から逃れられないに違いない。

爺様は、普段はコンビニで売っているミニ大福もちを一つ買って、半分だけなら許されるので、味わつてたべるのだと言う。これが一番の楽しみだと。入院中は、この楽しみが奪われてしまう。もしも、ミニ大福を半分でも食べれば、血糖値検査ですぐばれてしまうからだ。

入院してきた時、病院慣れした爺様と思えたが、話を聞くとまわりの糖尿病を患っている人が苦闘しているのと同じように、食べたいが食べてはいけない。なんとやるせない心の葛藤に悩んでいたのだ。

爺様の自信に満ちた振る舞いも、入院生活に対する不安への裏返しではないかと、よっちゃんは思った。

途方に暮れて…の巻

類は友を呼ぶ、という。だからなのだろうか。私の友達の一人が突然、おかしくなった。「芥川だより」にはなるべく明るい話題を選びたいと思っていたが、こひと月、その友達のこと頭の中がいつぱいで、自分でもどうしたらいいのかからなないので、敢えて書いてみようと思う。すべて事実である。新年早々、暗い話なので申し訳ないのだが。

友達の名前を仮にK子とする。けい子等の名前のイニシャルではなく、恐怖のK子である。K子はある日突然、「恐怖におびえるK子」になった。としか、私には思えない。「集団ストーカー」をされているねん。怖くて、表にも出られない…。最初にK子がおかしなことを口走ったのはこういう内容だったと思う。AKB48でもないアンタが何で集団ストーカーされるんよ？と聞くと、「万引き犯にされてもて。だから、見張られてる」。

何、それ？「見張られているって、誰に？」「警察…」「警察がどうして？」「だから、私、犯罪者にされてしまっているから」「…」K子の名譽のために言わせていただくが、K子は犯罪なんて大それた

ことができる人ではない。どちらかというと、人の目を気にする小心者。百円拾っても、交番に持って行って、おまわりさんに迷惑をかけてしまうようなタイプである。

だのに、K子は一緒に出掛けると、きよろきよろ周囲を見回し、「あれ、警察の人やわ」としきりに言い出した。落ち着かないこと、甚だしい。

ある日、喫茶店で、窓際の席に座っていると、窓越しに見える人を「あの人、刑事やわ」と言う。慌てて窓の外に目を凝らすと、どう見ても、企業をリタイアして二〇年は経つていそうな、元サラリーマンという風情の男性である。「警察ではないと思うよ」と言うと、「あれぐらいの変装はするから、こつちを油断させるために」と本当に刑事みたいに鋭い目つきで、窓の外の老体から目を離さない。

その老体は、五、六人の仲間と店の外で合流したかと思うと、店内に入って来て、コーヒーやら紅茶やらを口々に注文し始めた。K子は案外冷静に「あれは違ってた」と言つて、ウインナコーヒーのクリームをせっせと掬つて、口に運びだした。K子になってから、食べ方がやたらに早くなった。「あと五分で食べないと、列車が出てしまう！」というような勢いの食べ方で、その食べ方も異様で、怖い。

串カツ屋に入ったときも、おかしなことを言い出した。「向こうの席の二人、刑事やわ！こつちをずっと監視してる」。小さい店で、その二人が私たちより先に店に居て、食べていたことがわかつているのに…。つい、腹が立つて、「この店に入ろうと二人で決めたのは、この店の前で。何で、警察が先に来て、張り込んでるんよ」。病気？だろうと思いつつ、むきになって言わずにはおれない。「もし、先に張り込まれていたとしたら、アンタ、よつぽどの大物の犯罪者やで」。私がそう言うと、泣きべそをかけたような顔になつて、「悪いことなんか何にもしてない！」と繰り返す。

電車に乗つても、デパートに入つても、周囲に監視されているという妄想に駆られるようで、「私が店に行くと、必ず店内放送される」「写真に撮られてネットに流されている」などと言う。もちろん、女優やアイドルに対するような好意や好奇心からではなく、「凶悪犯」を追い詰めるために。「アンタ、凶悪なこと何もしないのに？」と言うと、「犯罪者に仕立て上げられた、世の中が怖い」と涙ぐむ。

ご両親は既に亡くなっていて、独身のK子は独り暮らしなので、K子の年上の友達と相談した。「とにかく、病院で診てもらわない」という結論になり、後日、K子に会い、「いまだき、メンタルクリニックなんて誰でも気軽に受診してるよ、

一緒に行こう」と真剣に促した。途端に、K子の態度が一変し、「精神病院なんかに行く気ない！ 精神病患者にされてしまおうっ」と語気荒く拒絶され、言葉を尽くしても、ガンとして聞き入れてくれない。

たまたま年上の友達のお姉さんが元看護師さんだったので、相談することにした。大きな病院の婦長（師長というべきか）だったというだけに、言葉に重みがあった。そして、最後に「身内でもない者が大人の首に縄を付けて、病院に引張って行くわけにはいかない。日常生活に支障がないようなら、様子を見守るしかない」と言われた。「大丈夫、そういう人は自殺なんかしない。仮にしてもアンタたちが責任感じることはない」とも。

第三者のお姉さんに相談したことで、少し肩の荷が下りたような気がしたが、何らかの解決を見たわけではない。K子は相変わらず、「部屋に誰かが侵入して、シンナーを撒かれた」「たくさんあった高価な品がなくなっていく」などと電話をしてくる。私を怖がらせる。その事実にはなくその被害妄想ぶりに私は怯える。「被害妄想と違うから、事実やから…」とK子。本当にどうしたらいいのかかわらない。「ねえ、Tちゃん（K子の本名のイニシャルだ）、私がアンタで、アンタが私だったら私に何をしてくれる？」その答えはもらっていない。(AO)

伊藤 明

「病む」「治る」「治る」

もとに戻るのが治ることか？

患者さんと会話していると私は治るの
でしょうかという言葉によく出くわしま
す。多くの患者さんがはじめて診察に訪
れた日から実際に治るまで何回かはこの
質問を私にぶつけてきます。じつはこれ
は精神科医にとって最も注意を要する言
葉のひとつなのです。質問の奥には往々
にして、否定的な返答があったときには、
治らないくらいなら死んでしまおうとい
う絶望感に裏打ちされた決意がかくされ
ていることがあるからです。実際にこの
質問に遭遇したときどうするか。もちろ
ん相手の患者さんの状態によって違う場
合があるかもしれないけれど・・・。

たとえばうつ病や神経症などが治るとい
う場合は、風邪が治るとい場合とは次
元が異なっているのです。内科の慢性の
生活習慣病、たとえば糖尿病や高血圧な
どの場合と似ているといっているいいかもし
れません。慢性の生活習慣病は食事の習
慣や運動の量あるいは酒タバコといった
もの、つまり生活の習慣ライフスタイル
に起因することの多い疾患といわれてい
ます。同様にうつや神経症といった精神
科的な疾患には、そううつ病（最近では
極性障害と言われるようになってきてい
ますが）や統合失調症のように、脳の中
の神経伝達系に問題が生じていると考え
られているものもありますが、その場合
もふくめてこころの習慣・考え方のスタ
イルに左右されることが多いのです。

うつの状態にはまり込んだ患者さんは
ほとんど百パーセントの方が、治るとは
もとの状態に戻ることで、と考えていま
す。病気になる前の若い時代、体力も充
実していた時代の輝かしい生活、その状
態にもどることが治ることだと思ふ。そ
の輝かしい時代に比較して現在の自分が
何もできない惨めな、拒否すべき存在に
しか思えない。とりかえしのつかないも
のを失くしてしまった絶望感に支配され
こんな情けない自分は生きる価値がない
から死んでしまいたいというパターンに
陥ってしまうのです。

うつの患者さんの発病前の生活を聞く
と無理を重ねていて、それが当たり前と
いう生活を続けていた人が多いのです。
治ることを病気になる前の生活に戻るこ
ととすると、論理的に考えれば、もう一
度同じコースをたどって同じ病気になっ
てしまうことが想像できます。実際に何
回もうつ症状を繰り返している患者さん
の中にはこのようなタイプの人がいます。
休養や入院をして抗うつ剤や安定剤を服
用して比較的早く状態がもとに戻り仕事
に復帰する、しかし仕事に対する考え方
や自分自身に対する見方は以前と変わっ
ておらず環境もあまり改善されない、そ
うするとまた無理な生活にはまり込みも
とのようになってしまった・・・という
具合に。

何かのための自分でなくていい
私は、うつで治療している患者さんに
よく次のように話します。状態がよくな
って家庭生活や仕事に戻るようになって
も、必ずどこか一点だけでも以前とはこ
こを変えたんだ、という自分の現実に関
した改善点をつくり、それを自分で繰り
返し確かめておくことが大切だというこ
とです。

このあたり事情はまさに糖尿病など
の療養の考え方に通じるものがあります。
糖尿病の療養では、入院などで血糖のこ
ントロールを改善することは重要なこと
ですが、本質的に重要なことはむしろ、
日々の生活の中で食事や運動などの生活
スタイルを改善することなのです。つま
り治った状態とは、以前の生活にもどる
ことではなく自分の体力に見合った新し
い健康的な生活スタイルと、思考スタイ
ルをつくっていくことになるでしょう。

うつの場合、糖尿病と異なるのは変更を
迫られるのが自分のアイデンティティに
密接に関わる部分であり、自覚するのが
より難しい点でしょう。

「病む」ということについてもう少し
考えてみましょう。うつになる、病むこ
とでそれまでできていたさまざまなこと
が一時的にせよできなくなる、そのこと
で自分の価値がなくなった、さらに自分
はもう生きる値打ちがないと考えてしま
う人が多いものです。しかし人間の価値
というものは何らかの機能を果たしてい
るからという点にあるのでしょうか。も
っと基本的には、生きていること、存在
していることそれ自体が素晴らしい価値
なのだとは思っています。何かのための自
分でなくていい、自分のための自分、背
伸びしない等身大の自分がいいんだとい
う感覚を大事にしたいものです。

うつのお母さんは子どもに対して自分
がなにもしてやれないから無価値で死ん
だ方がましと言う。しかしそうではなく

て、お母さんがそこにいる、存在していることが子どもにとって一番重要なことなのです。昔の人は疾病や災害など常に死と隣り合わせで生きていたと思われませんが、それだけに生き続けることの難しさ、存在の困難さⅡ「有り難さ」を自覚し、生きていること自体に感謝の念をもっていたのではないかと私は想像します。ところが現代の日本社会の風潮は、その人がどんな機能をもつか、そのみに注目しようとする傾向が強いと私には思えます。この典型が「会社」の論理です。役にたたない、給料に見合った働きをしないと判定された人間をリストラしていく。これと同じような考え方が経済的にも時間的・空間的にも余裕のない家庭のなかで、われわれを徐々に支配していつているのではないかとさえ思えます。主婦として、あるいは収入源としての機能が一時的にせよ障害されて遂行できないときには、家族の他のメンバーに負担をかけるのを自分で責め立て自分を抹殺してしまうほうがよいと感じてしまう。

これは現代の日本という社会のなかでわれわれの気づかないうちに仕組まれたありふれた悲劇のひとつだといえないでしょうか。

《筆者の都合により次回より隔月の連載にさせていただきます。よろしくお願いいたします。》

思い起こせば去年の丁度今頃、灼熱のアフリカ大陸、砂漠の国ナミビアを離れてお正月は大西洋で迎えたのです。日本以外の土地で正月を過ごすのは勿論はじめてですが、真夏の洋上というのはそれこそ想定外です。

さて、この旅行記の船はまだ出港して一ヶ月、全体の三分の一しか進んでいません。文字通り、ゆっくりしたスローな船旅です。次に目指すは南米大陸ブラジルのリオデジャネイロ、上陸予定が一月七日ですから大西洋横断は一〇日あまりかかるのです。のんびり行きましょう。

航海は相変わらず順調です。大きな嵐にも遭遇せず穏やかな水面を船は滑るように入っていきます。こんな海で遭難する船があるなんて信じられないくらいです。

それでは今月のレポートの方はお正月特別企画にしましょう。この旅行記では普段の陸上の生活ではめったに起こらないような興味があることを書いています。が、今月は人間関係に焦点をあててお話ししましょう。以前からも散々書いておられますが、長期クルーズというのは単なる団体旅行ではなく団体生活に近いものです。とはいっても千人近い人が集団で暮らすので一つの村みたいなものです。

船室を一步出れば、そこはもう街になるわけです。しかし、朝、昼、夜の食事を除けば人々が集まる場所はそれぞれ自然に固定します。ダンスや絵画などの習い事はその部屋に集まるし、運動会や文化祭などのイベントはその毎にリーダーが集合をかけます。その他、ウォーキングや読書など自分の好きなスタイルで過ごす方法もあります。

ですから沢山の人がいても会う機会はものすごく限定されます。人間関係というものは不思議なもので類は友を呼ぶというか同じような趣味や興味を持っているものは自然と集まり仲間になるものです。

例えば、私が宗教をテーマにしたサークルに入っていて知り会った人が、また違った歴史のテーマサークルで会うとか。そんな風にして沢山の知り合いができました。私の場合、大まかに分けると、英会話サークル関係、句会関係、歴史学関係、そして楽器演奏関係です。

最後の楽器演奏というのはいくつかあります。長い航海なのでピアノがある大きなステージがフリーに楽器練習ができる場として毎朝、解放されます。

みんな思い思いの楽器を持ち込んで練習します。ギターあり三味線ありフルートあり、いっせいに鳴りだすので騒然とします。私がピアノを弾けるものですか、ある朝、ホールのピアノを少し弾いて

いるとサクスを吹いているひとが伴奏をお願いしますといってきました。

適当につけると、その人は感激して、自分はジャズの初心者でこの船で練習してレベルアップしたいといいます。それじゃ、たまに伴奏つけますよ、ということが始まったのです。

これがきっかけでドラムもボーカルの人も加わり、また船の専属のフイリピンバンドも加勢したりで、私たちのジャズバンドは結局、ナイトクラブや音楽祭、様々なイベントに引っぱりだこ。これはこれでよかったです。おかげで練習時間にとられ自分の時間が制限されませんでした。

ということ、このような長期の船旅では受け身でなく、自分がアウトプットできるものが何かないと生活が単調になります。しかし物は考えようで、そもそも忙しい陸上の生活を脱出して船に乗ったのになぜ同じような生活をするのという意見もあります。この意見のほうが良いように感じるような場面も少なからずあります。

ばたばた時間に追われて中で悠然と本を読んでいる人がいる。また、じっと海を見ている人もいる。私たちは時間の過ごし方が上手くないのかもしれない。ずっと時間に追われてきている。予定がないと何かしら不安になる。これが現代文明病かもしれない。

何事も他人が決めたスケジュールしか行動できない、主体性のない生き方です。ゆつくりと自分のペースで暮らすことができない生活習慣病ですね。よくテレビで欧米の人々がバカンスで浜辺に寝転がって本を読んでいる光景を見ます。ああいったのが私たち、少し古い言い方になりますが、エコノミック・アニマルに出来ないのだなとつくづく思います。

では、特別企画の本題に。人間関係特集です。クルーズ船の船室はシングル、ダブル、四人部屋とクラスがあります。基本のスペースはダブルで、この大きさに一人、二人、四人が居住します。お大まかにですが、今回の船室料はダブルで三〇〇万円くらいでしょうか。ということとは二人ですから一人は一五〇万円、これに食費をいれると一人あたりの旅行費は二〇〇万円ほどになります。シングルは一人なので食費をいれると三五〇万円くらいになります。皆さんがこのクルーズのポスターでよく見られる「世界一周九九万円」というのは四人部屋の最低クラスの料金です。最低クラスというのは船底に近い部屋で勿論窓はありません。このように船室料金は窓の有無、階層によっても上下します。映画「タイタニック」に出てきたように下の階は沈没したとき扉を閉められるということもありうるのかも。

さて、このような居住空間に長期にわたって人が生活すると人間関係はどのよ

うなものになるのか。私が見聞きした中では四人部屋で人間関係が良好に保てられているところはほとんどなかったです。

まず悲惨なのが女性の部屋。旅慣れた人はいち早く部屋に入り、二段ベッドの上階を占有してさっさと荷物を置く場所も確保します。慣れない人は後からやってきてグズグズ言うのです。ここで険悪な雰囲気になります。

さらに、部屋のシャワー室でのトラブル。髪の毛を染めて臭いとか、極端な場合、トイレは外でして来てとか。恐ろしい戦いが毎日繰り返されるのです。男性とて同じです。常に重いリュックを背負って船内を歩いている人を見ました。あの人どんな人と周りに聞いてみました。すると、日中は部屋に居られないから必要な物を全部もって外をうろろしているのだとか、夜はそっと戻って寝るだけだそうです。喧嘩はしょっちゅうの部屋もあります。散々愚痴も聞かれました。しかしまだ喧嘩とか怒鳴りあいとか表にでる方はましかもしれません。

ある時、船医から恐ろしい話を聞きました。ある人が医室にきて、自分は人を殺しそうだと叫びました。聞くと部屋のなかの人間関係によるストレス。その人は、次の寄港地で船を降りて飛行機で日本に帰りました。恐ろしい話ですがこれが現実。しかし、この様な話は誰でも

が知ることなく、たまたま私がいろんな人の関係と興味で知ったことで、普通の

乗客はほとんど知らないまま表面は楽しい生活を過ごしています。でもこれは船という特殊な環境だけではなく普段の陸上の私たちの社会にもあることなのでしょう。ごく普通の町でおこる最近の異常な事件はこのことを象徴しているようです。ただこの船では何事も極端に現れるのだけかもしれません。

少し暗い人間関係の面を紹介しましたので今度は明るい面を話しましょう。お待ちかね、男女関係です。世の中、男と女が寄れば、年齢に関係なく恋愛が生まれるのは自然の成り行き。しかもここは俗世から隔離されたパラダイス。以前にもこの乗船者の年齢層の話はしましたが、圧倒的に中高年。しかも女性がやたらに多い。日本人の平均寿命は女性が八六・六歳、そして男はやつと八〇歳を越えたとか。こんなに差があれば女が元気で多数なのは当たり前。おばさんパワーはすごいです。以外と思われませんが夫婦で参加しているひとはかなり少ないです。

一番多いのが女性の友達同士。男性は圧倒的に一人参加。私もそうですが、単身者でなく既婚者であっても男性は単独参加が多いのです。女性の参加者の多くは単身者です。こういう構図は陸上の社会と同じですが、ただ旅行に参加という意思が必要な分は女性の独身者が圧倒的に多いのです。

男女関係が顕著に現れるのはダンスです。社交ダンスというのは男性主導です

からパートナーを見つけることは非常に重要なこととなります。船の中の社交ダンス教室ではルールとしてパートナーは先生の合図で交代しなければならぬのですが、数少ない男性を一度放すと他の人に盗られてしまったため、女性が男性パートナーを獲得すると離しません。

それを強引にアタックして横取りすると女の激しい戦いがはじまります。あの女は男たらしや、毎晩部屋に男を引き入れているなどと嘘か本当かわからないような噂がどんどん流れます。女の執念は誠に恐ろしいものです。ある女性に聞くと、そもそもリピーターは船を降りるとすぐにダンス教室に入って次の船に乗るまで必死にダンスのレベルアップを目指すらしいのです。そして再び船に乗って、真つ先にダンスでパートナーを獲得するのだとか。嘘のような話ですが、私が話した女性は皆さんそう言っていました。さて、その狙われる男性の方はどのような人かという大抵、既婚者です。勿論、奥さんを日本に残しての単身乗船

しかし、カップルの方は独身の女性がそういう事情がわかっていても交際が始まるのです。男にとつては天国みたいなところですよ。じゃ、私がどうしていたかですね。まあ、皆様の想像に任せますが、深入りすると大変なことになります。相手は短期といえどもめり込むとなにも

失うものがないので怖いです。

ある女性の惚気話を聞く機会がありました。わたしが、この船の期間だけでなく日本に帰っても想いを通したらと聞いたら、まるで少女の如く夢見るような表情に変わり、溜息をついていたのが印象に残ります。

さて正月特集、長期クルーズの人間模様どうでしたでしょうか。船の中が特殊とみるか、そんなの今の世の中で普通ですよと、私たちだけが知らなかった世界なのか。まあ、一つだけ言えることは、船の中はそうは言っても基本的に暇なため、私が結構気楽に女性たちと話した結果、

情報が収集できたのかも。そうとすればこんなことは今でも日常のことなのか。まだまだ知らない世界は沢山ありそうです。

それでは無事、年が明け、いよいよ南米大陸も見えてきました。次回もご期待ください。



京都・伏見稲荷大社では初詣とともに、「初午」の行事が盛んですが、これは二月初めての午の日のこと。伏見稲荷の神様が降臨された日ということ。神の使いの狐の好物が油揚げであることからこの日にいなり寿司を食べるようになったという話もあります。今回の話はこの日に起こった稲荷詣での一場の笑劇です。教科書に出ない度は四／五。

稲荷詣で顛末巻(二八ノ一)

今は昔、二月の初午(の日は、昔から京に住むすべての人々にとつて、伏見稲荷詣でにと集う日であった。その年は普段より多くの人々が詣でたものであった。

その日、近衛府の役人たちが集まって稲荷に参詣した。尾張の兼時、下野の公助、茨田の重方、秦の武員、茨田の為国、軽部の公友などといった錚々たる舎人の人々が、食べ物をいれる破子の弁当や酒などをもたせ、連れ立って詣でた。一同、稲荷山の中腹のお社近くまで来ると、参る人返る人がさまざまにすれ違っている中に、素晴らしく着飾った女に出会った。女は光沢のある濃い色の上衣に、紅梅や萌黄といった襲の色目を着て、色気たつぷりに歩いていた。

この舎人の集団が来るのに気づいて、女は道を譲って木の蔭に隠れて立っている。そこに来合わせるとこの舎人たち、

いい気分でおだやかならぬ卑猥な言葉をかけた、あるいはかがんで女の顔をのぞき込もうとしたりしてすれ違っていた。その中でとりわけ重方は元々が好き者であった。その細君はいつも重方の浮気を妬んでいたのだが、本人は無実だと否定し言い訳をしていた。そんな重方、この一団の中で目立って立ち止まり、この女をじろじろねめまわし、近寄ってあれやこれやと口説く。女「奥様をお持ちの方が、ただ行きずりの出来心でおっしゃることをお聞きするのは、とつてもおかしいですわ」と、かわす声もとても魅力的であった。

「おお、別嬪でいとしいあんたはん、確かに私めは卑しい嫁をもつとりますが、その顔はサルのように、心だてはさもしい行商のオバハンのように。離縁しようと思つとりますが、そうするとたちまち着物の綻びたん縫つてくれるお人が無くなって困ってしまうので、ええ女はんがおらはつたら、たちまちそれに乗り換えようと堅う決心しとおるからこそ、このように言うんどす」と、重方は言いたる。

女「これはまじめにおっしゃるのですか、それとも単なる冗談？」と問うと、重方「このお稲荷さんにも聞いてもらいまひよ。年来考えとおったことを、神さんが靈驗あらたかにこのようなチャンスを与えてもろたと思うと、ごつつ嬉しいもんどす。ところであんたはんは、独り

身でいはるんでつしやるな。またどこ住まつてではるんどす」と問う。

女「私にもこれといつて決まった旦那さまがあるわけではございませぬ。宮仕えをしたいと思つておりましたが、人が制止しましたので、参内せずにその人と一緒にになりました。ところがその人は田舎で亡くなつてしまいましたので、この三年というもの、頼りにできる男はんがいらしたらと、こうしてこのお社にお参りしているわけでござります。まじめに思つて下さるのなら、私の住みます場所もお教えしましょうことを。いやいや行きずりの方のおっしゃることを信用してしまうなんていうのは、バカですわね。さつさとあちらへ行かれなさいませ。私も失礼いたします。」と女、行き過ぎようとする。重方もみ手をし、それをまた額に当てたりして、女の胸元に烏帽子の先がくるほど頭を下げ、「神さん、お助けくだされ。そんなに冷とおせんといておくんははれ。ここからはもう、私の家には絶対帰らしまへんよつて。」と言つて、俯して拝んでいる男のその髻を、この女烏帽子ごとぐいとわし掴みにして、重方の頬にパシーンと張り手を入れた。

重方、たまげて「こ、これは何をなさる」と、その女を仰ぎ見ると、何とまあ自分の細君だった。重方狼狽して「お前さまは、氣いふれたんか」と言うと、女「アンタはどこまでいけシヤアシヤアとうそつけるんや。アンタが後ろめたい

◆ 瑞穂の国 水より安い 米作り

一光

突然ですが、よもだにもならない川柳が湧いてきました。つい先日、新米を炊いて、うまいなあと夕食を始めたときでした。皆さんは、米を食べながら米の値段を考えたことがありますか。

それにしてもなぜ今頃新米なのか。我が家では、九十九歳になる母の里で二十歳以上年の離れた末っ子の弟（つまり伯父さん）が小さな棚田で作っている米を分けてもらっています。十二月になってはまだ昨年末が残っていて、やっと新米を食べる番になったところでした。米の値が下がったと伯父さんも言い、ニュースにもなっていたのを思い出したのです。

たとえば、三〇キロが一万円の米だと、一キロ当たりの価格は三三三円です。米は一キロが七合だといえますから、五〇〇ミリリットルのペットボトル一本当たりの米の価格は約一三二円です。

$$333 \times (500 / (7 \times 180)) = 132$$

少なくとも、自動販売機で買うお茶や水より米の方が安いのです。

しかも、農協に米を納め、農協から生産者に渡される概算金は、小売価格の半

油断ならんやっちゃと、このお人らが日ごろ言わはるんで、私の腹を立たせようと言わはるんやろと信じんかったのに、これは本当やったんや。アンタがぬかしたように今日から家に帰ってきたらさぞかし神罰の矢アが当たるにきまつとる。ようこんなことを言えたもんや。その面をもぎって、道行くお人にさらし者にして笑ってもらおやないの。」

重方「まあそんなにいきり立たんと。それも尤もな話しでんなア」とヘラヘラ顔で「機嫌をとろうとするが、細君は一向に許そうとしない。」

そうこうする間、他の舍人たちはこの事情を知らないで、先の崖の上に登り立って「重方はんは何で遅れてるんや」と下を見ると、女と取っ組み合いをしている。舍人たち「あれはどうしたんや」と走って引き返してみれば、重方は細君にすつかりやられてしまつて呆然と立っている。舍人たち「奥さん、ようやはらつた。わてらが言ったとおりでっしゃろ」と細君を褒めちぎるが、女こう言われて「このお人らには、アンタの下心はお見通しや」と、重方の髻を放したので、重方はクシヤクシヤになった烏帽子を被り直して、道を登っていった。一方女は「アンタはそのええ女のとこ行きさせ。内に帰ってきたらば、足へし折つたるし」と言い捨て、道を下って行った。

さてその後、重方が家に帰つて「機嫌をとるので、細君の腹も収まつてきた。」

そんな時、重方「おまはんは、やつぱ重方の嫁はんだけあつて、こないに巧くだましたもんやなあ」と言うのと、「黙んなはれ、このアホンダラ。この目は節穴でっしゃろ。自分の嫁はんの姿も見分けんと、声も気が付かんと、この間抜けぶりを人に曝して笑われるつちゆうのは、大それたアホぶりやおへんか」と、細君にも笑われる始末。

その後この事が世間に知られて、若い貴族の君たちによく笑われるようになったので、重方、若い貴族の前からは、逃げて歩いていった。

またこの細君は重方の亡くなった後、女盛りになって今では別の男と再婚しているということだ。《終わり》

《コメント》

これは、なかなかよくできた一場の笑劇です。恐らく実話なのではないでしょう。現代でも吉本新喜劇なんかによくあるタイプの話です。九百年も前の、こんな市井のエピソードをビビッドに伝える「今昔物語」のすごさを改めて感じます。またその舞台がごく身近かな所であることにも親近感を感じます。伏見稲荷の初午は、現在でも盛んに行われている年中行事ですが、九百年前の平安末期にはすでにこの初午の稲荷詣でが、都の年中行事の定番になっていたらしいのは驚きです。それにしても最後の一文から、女のしたたかな生きざまをみる思いがします。

分程度です。農業協同組合新聞インターネット版 (Ja.com) の報道によれば、六

〇銘柄の米について、平成二五年産米では一俵（六〇キロ）当たりの概算金一万円以下はたった一銘柄だったが、二六年産米では一万円を超えたのが一三銘柄だけで、他は軒並み七千円台から九千円台になっているということです。昨年より三千円以上安くなっている銘柄は二四で二〇〜三〇%の下落も多いといえます。

古米が山ほど余っていると、米を作り過ぎているとか、日本人は米を食べなくなったのだからとか、競争に耐える農業を、とか素老人には難しい理屈はわかりません。ただ思うのは、営々と守られた田んぼで水を吸い、お日様に当たり、手間暇かけて実った米が水より安いわけがわからないということだけです。

水を張り 手間暇かけて 実るのに

水より安い 米作りの国

一光

瑞穂の国のあり方はどこで変わったのでしょうか。誰が変えたのでしょうか、おかしいではありませんか。そういうことがありましたけど、安ければ毒入りでも買うのですか。また、戦国の時代からあった兵糧攻めは、近代戦の爆撃以上に怖いことも忘れてはいけません。国民を飢えさせないためには、爆弾や車より

かと。

ひとくちに先天盲といっても失明時期や残存視力の程度による違いがあるので、開明手術後、目で対象をなぞるような形で視覚を使うことから始めて適切な訓練を受けることで色や二次元図形についてはある程度まで見分けられるようになりますが、三次元の認識は時間をかけても困難であると言われています。これはそもそも遠近は斜めの線で視覚的には認識するのですが、触覚的には認識不可能なためと言われています。立体図形はちよつとした視点の移動によって全く異なる網膜像を与えますし、陰影と表面の柄の交錯も事態を難しくしているようです。また人影を見分けることができるようになっても接近離脱に伴って人が伸び縮みするように感じられて気持ちが悪くなることもあるそうですし、階段の昇り降りの際には目をつぶったほうが安全という話も聞きます。それでは美的感覚はどのようなものなのでしょうか。盲人には盲人なりの美的価値観があるはずで、それは触覚に依存する部分が大きいと思われれます。また盲人が触覚で対象を認識するとき視覚中枢が活動しているという報告もあり、視覚と触覚は不可分の関係にあることが推察されます。このようなことを考え合わせると開眼者においては触覚をなぞるような形で視覚的な美意識が形成される可能性があります。もつと

も開眼者の視覚弁別力は訓練を経ても触覚のそれに遠く及ばないので触覚が使える場合はそちらからの情報が優先されることになるのではないのでしょうか。

さて、今回の勝負はやや経験論に軍配が上がったようですね。そもそもこのような問題が提起される根本問題は何だったのでしょうか。原点に帰りましょう。それは人間が実在をどの程度、把握できるのかということですが、実在というと、この机とかあの花とかいう、見ることができたり、触ったりすることができません。しかし、人間は視覚や触覚に頼らないものも認識できます。例えば、竜とか麒麟とかといった想像上の物、そして宇宙の始まりや世界の果てなどです。こういうことがどうして可能なのかという問題でもあります。前回、合理論は明確な定理から推論する演繹的、経験論は個々の事実の寄せ集める帰納法的という話をしました。さらに今回は人間が物事を判断するときの文章表現としての哲学术語を紹介します。それは、合理論には分析判断、経験論は総合判断が割当てられます。分析判断とは例えば『独身者は妻がいない』とか『電車は電気で動く』といった主語のなかにすでに述語の概念が含まれている判断のことで、これは経験せずとも判断できる合理的判断です。一方、『今年の正月は寒い』とか『あの娘は優しい』などというもつと

と主語に含まれていない概念を付け加える時の判断を総合判断といいます。これは経験してはじめて判断できる直の経験論ですね。このような区別を明確な形で述べたのはドイツの哲学者カントです。カントによれば、経験的な判断はすべて総合判断であるが、すべての総合判断が経験的な判断であるのではなく、アプリアリ、つまり経験に先立つような総合判断が存在すると言いました。デカルトが一七世紀前半、ロックが一七世紀後半、そしてカントは一八世紀になっていよいよ大陸合理論とイギリス経験論を乗り越える統一理論を構築しようとしたのです。現代の宇宙論、統一理論みたいですね。それにしても正月そうそうに哲学者でも難解なカント先生が出てくるとは思いもしませんでした。こんなコラムを読みながらお屠蘇気分になれるのでしょうか。さあ、私は自宅リハビリ再開します。今年も皆様小難しい話のお付き合い宜しくお願いします。



一対十五からの起死回生

大江雉鬼

継子算ままこざんという言葉がある。正確にいうと、古くからある言葉は「継子立て」であり、それに関連するかのごとく継子算なるものが見え隠れする。

「継子立て」とは、碁石を使ったゲームである。ルールはいたって簡単。碁石を黒白それぞれ決められた数だけ取り、最初にそれらを丸く円状に並べる。並べる順序は自由である。次に任意の数を決め、始点となる石からその数を進んだところの石を取り除く。さらに、取り除かれた次の石を始点として同数だけ進んで同様に石を取り除く。このように決められた数だけ進んで一個ずつ取り除いていき、最終的に残ったのが黒になるか白になるかで勝敗を争うゲームである。「継子」の名が宛てられるのは、黒白を先妻の子（継子）と実子に、そして最終的な勝者を跡継ぎになぞらえているからである。要するに同数の継子と実子による跡目争いが行われており、候補になる子どもたちが輪になって並んでいて、継母が我が子を勝たせるべく算段を練っている。そういうふうな見立てである。

もの本によれば、最初に割り振られる石の数は十五個ずつ、そしてカウントされる数字は一〇であるとのこと。古くからのゲームなら、そういう具合に数が

固定していたのかも知れないが、勝敗を決めるだけなら原理的な部分が固まっていれば問題はない。つまり、黒十五個と白十五個に対して一〇個を数えて取り除くのではなく、「黒白n個に対してk個をカウントして取り除く」だけでもルールは成立するということである。

これが「継子立て」と呼ばれるものなのだが、黒十五と白十五、一回の試行で一〇を数えるとした場合、実は面白い現象が知られている。それは最初に行われる十四回の試行で黒もしくは白のいずれかが一方的に取り除かれ、仮に一対十五になったとしても、そこから大逆転を起こすことができるというのである。具体的には、白一対黒十五になった段階で、次の一回に限り始点を圧倒的に不利な一個の側、このケースでいえば白から始めるように変更するのである。そうすると続く十五回の試行ではすべて黒が取り除かれる、つまり一回から十四回目の試行では白ばかりが取り除かれ、十五回目から二十九回目までの試行では黒オンリーの除外という起死回生が起きるといえるのである。

一見すれば偶然のようだが、ここには数学的なロジックが存在する。その方面には疎いので正確さを欠いているかもしれないが、要約すればこんな感じだろうか。「n+1個の対象についてk番目のものを順次除外していくというルールを定めた場合、最初に数え始めた対象が一番

最後まで残る(n, k)の組み合わせは、あらかじめ決まっている」という命題である。これを先の継子立てに当てはめると(n, k) || (一五、一〇)だったからこそ大逆転が起きたのである。十五対十五の状態から一対十五になるところは話を盛り上げる前振りにすぎず、本筋とは関係がない。

この一対十五からの大逆転は古くから経験的に知られていたようで、十七世紀の中頃、江戸時代の初期に出版された算術書『塵劫記』にも紹介されている。しかし、そこに存在する数学的なロジックを解き明かしたのは、和算の大成者として有名な関孝和で、その『算脱之法』に従えば(n, k)の組み合わせには(一五、一〇)の他にも(二一、一〇)(七〇、一〇)(二六、一〇)、あるいは(四、八)(九、八)(二九、八)などが存在するらしい。継子の比喩に当てはめるなら、一人対十五人ではなく、七〇人または二六人の敵に囲まれていても継子自身から一〇を数え始めるだけでよかったことになる。あるいは敵が十九人の場合でも自身から数えはじめ、かつ数える値を八に変更できれば勝利は確定していた。数学的なロジックを背景にしたの出来レースを仕組むことが可能だったのである。

ところで言葉の問題で考える「継子立て」と「継子算」だが、ゲーム自体を話題にする場合は「継子立て」で、ゲーム内での特定の状況下で生まれる数学現象

をいう場合には「継子算」と見ておけばいいだろうか。関孝和に従うのなら、先に挙げた「算脱之法」というテクニカルチームがあるのだが、いつしか耳に入りやすい「継子算」となったのかも知れない。インターネット上で利用できる辞書の類には「継子立て」と「継子算」を同義であるかのように記す記述に見られるが、実際の用例を確認するなら、継子立てについては徒然草の有名な「花は盛りには、月はくまなきを」云々の章段にも見られるのに対し、「継子算」という言葉が確認できたのは明治の算術書である。手許にある資料やネット検索をかけただけのいい加減な調査なので、厳密さは期待できないとはいえ「継子立て」と「継子算」を同義であるかのように扱うことはできないはずである。

ちなみに、徒然草での「継子立て」だが、「継子立て」といふ物を双六の石にて作り」とあるだけで、石の数に関して具体的な言及はない。そして一つずつ取り除かれていくさまを、こう書き立てる。数えて一つ取り除くと他は助かっと思っただが、さらに数えて間引きを重ねていくので、結局はどの石も逃れられそうにない。すべてのものが死すべき運命にあるとする兼好さんお得意の無常論になだれ込んでいく。そこには数学的な香りはいらぬ。これはつちもなく、無常の世を儚んでみせる運命論者が佇んでいるだけである。

引き継ぎ

Tさんは入社年度で言えば昭和四四年で、大阪に本社があるS電機に入社して、本人が望んだ貿易本部に配属され、前途洋々のサラリーマン人生をスタートさせていた。しかし、三年目の四六年（一九七一年）にニクソンショックと言われる、

それまでのドルと円の固定相場制から変動相場制に移る世界経済体制の大きな変革が起きた。一時的にはそれまでの一ドル三六〇円が三〇八円になり大幅な円高になった。そのため、輸出が減り、採算も悪くなったため、貿易本部の大幅な人員削減がなされ、Tさんは貿易部から関東の工場に転勤ということになった。

自分は大学でもESS部に所属して英語を使う仕事がしたいと言う理由で会社を選び、希望した貿易部に当然の如く配属になったのに、何で自分が工場に転勤にならないといけないのか、しかも土地鑑のない関東なんかと言うことで、会社を辞めてしまった。

その翌年にこの会社が貿易部門を拡大するという事でTさんは採用されて、即戦力として、輸出部に配属された。この話は、後で、二人きりになった時、聞かされた。回りの人は皆、この話は本人か

ら聞いて知っていたようである。

その後、Tさんとは、ずっと同じ課で仕事をし、五年後は課長になり、私の上司となった。もし、辞めずにS電機に残っていたら、今頃は、副部长くらいになり、まあ、ボーナスは今の会社の二倍は貰っているやろなあ〜と何か会社、組織上司に不満がある時には必ず、愚痴ともなく、部下の誰かに自分に対する戒めのようにも取れる様に言っていた。

「明石君、人間は若い時は、何でもなあ、直ぐに目先だけの情報で判断して、失敗したり、躓いたりするもんや。仕事も、結婚もそうや。長い視点と多面的に判断し、信頼できる人に相談するようにしないと間違えよなあ」と言われたが、明石は既にこの時結婚して、子供も一人いたので、結婚もそうやと言われて、自分の場合はどうであつたかと思つても、どうすることも出来ないもので、これは聞き流していた。

若い独身の社員には何かあると、自分の体験から来る教訓と教育のつもりで言っていた。因みにTさんは土地持ちのお嬢さんと見合い結婚され、その時は三人の子供さんに恵まれ、物心共に、家庭的には恵まれていた。

Tさんとの引継ぎは、商流として、S商社が入るとのことと、中国対応として、特別な事としては、技術交流と称した現地に機械化の指導と教育の為に、技

術サービス員を三月頃から約一ヶ月間、五〜六人を東北三省に送り出す。その段取りと後のフォローに付いてのことであった。

Tさん作成の引続書には中国に輸出した機械とそれに付随する機器類が多く書いてあつた。明石には始めて耳にするような機器類であつた。Tさんは、

「機械本体以外は、関連商品と言つて他社で作つた製品をウチのOEMとして購入して、それに経費を載せて売るので、本機は採算が取れなくても、この関連商品で儲ければ、トータル的にはプラスが出たら、良しとするのが本部長とK部長の方針や。技術サービス員の派遣費用は本部全体の予算で見ると、兎に角、サービス員を出来るだけ多く送り込んで後々の機械の操作ミスや何やでクレームや、他社に比べてサービスが劣ると言われないようにやらんといけない。当然、業界のリーダーとして日中友好に努め、中国側に対する我社の存在感を高めて、将来のビジネスチャンスに繋げるのが、今の我々の仕事や」と中国貿易の役割と方針を説明した。

それに対し、Mさんは、「Tちゃん、俺らがしんどい目をしてても、花は咲くことはないの?」と聞くと、

「Mちゃん、相手は社会主義の国やで、我々の資本主義的な発想、考え方では通用しない、時間が掛かる国や。体制が変

われば別やが。短期的には大きな市場にはならないけど、鄧小平の改革開放政策で段々と西側と経済交流を図ってきているし、あれだけの国土を抱えた国だけに機械化は何れやらねばならないわ。まあ、Mちゃん、明石君よ、我々がやってる間は、種まきの仕事や。水撒いたり、草をとつたりの地味なしんどい仕事が多いわ。これも、誰かが根気良くやらないと、折角この三年間何やらと技術交流を図り、機械も採算を度外視して受注してきたことが、止めてしまうと、将来に全然繋がらないことになる。まあ、刈り取るのは、まだまだ先や。Mちゃんが部長になった頃かも分からんし、もつと先かも知れん。まあ、万里の長城を作つた民族が相手や、短期的な考え方では、上手く行かないことは、確かやで。」と答えた。

Mさんは、「そうか、それは、俺には向いてないなあ。担当は明石やから、彼に全部任せるわ。あの厳しいS工場の経験もあるし、地道な仕事に向いてそうだし、Tちゃんと同じように中国に興味がある時代からあつたそうやし、担当した国との相性もあるから、丁度、エエのと違う?」明石頼むわなあ〜何か問題があれば、俺も手伝うし、相談に乗るから、安心しろよ。Tちゃんもお前の席の前に座つているので、何でも聞けるしなあ。Tちゃん、どうや、他何か、引き継ぐことある?」と言うことで、全部こちらに任せられたと

いうよりは、振られたという感じがした。

Tさんは「明石君、Mちゃんがそう言うことやから、君に後は任せただので、頼むよ。何か質問はある？何でもエエので、この際聞いてなあ」と仕事を引続きで、肩の荷を降ろした気分になったのか、Tさんは、笑いながら、頼むよと言う声がやけに大きく聞こえた。

それに対し明石は「Mさんがそう言われるのであれば、やらせて貰いますが、何かあった時にA課長の意見とMさんの意見がもし違う時は、私はどうすれば良いのですか？」と、直感的にMさんに自分がやることに余り関与しない事を期待して聞いてみたら、

「明石、お前の好きなようにやれや。Aさんがごじやごじや言うのやったら、俺が応援してやる、なあTちゃん」と何故かTさんに同意を求めた。

Tさんは「明石君なあ。仕事は上司が何を言おうと自分が正しいと思ったら、信念を持って、上司を説得し、やり通すぐらいの迫力を持ってやらんとアカンで。大丈夫、AさんはK部長の方針には逆らわない、俺が今、アンタに言ったK部長の方針にベクトルを合わせてやったらエエのや。このおっさんは、人を良く見ているぞ。一旦、口に出したことは、良く覚えてるので、以前と違う事を言い、その事が矛盾していたら、コテンパにやられるぞ。この部門は、K軍団と呼ばれ

て、考え方がフラフラしている奴は、居られなくなるんや。兎に角、Kさんの方針に従う事や！。

この人は、方針を出すだけで、後は、全て担当者に任せて、やってみなはれというやり方や。その代わり、担当者がこの国のやり方はこうあるべしと言う考えを持っていないと、コイツは、仕事をしないと言う、厳しい評価が下されるのや。君も挨拶に行つた時に言われたやろ？絵を描けと言うことを！エエやないか？Mちゃんなんか、気にしないで、どんどんやれば、エエやんか？なあ、Mちゃん？」と、明石を盛り立てるように言ってくれた。

その言い方にこのTさんの何とも言えない人柄が滲み出ていたのを感じた。明石はこれで、自分のようなB級サラリーマンでもこの部門でやって行けそうな気がしていた。



投稿小説 消える

古城悠

ペーパーナイフどこへ置いたっけ？

またモノが無くなった。こういうことが時々起きる。いつも使っているペンとかなら消えたりしない。でも時たましか使わないもの、それが必要になったとき、消えていることに気が付く。書類をまとめて認めを押すときの印肉だったり、改まった手紙を書く際の筆ペンだったり。買った記憶はあるのに、引き出しの中には見あたらない。

またかあ、イヤだなあ……まあいいや

独り言を言つて、多佳子は机を離れた。

そうして、帰宅したなり、脱ぎ散らしてベッドの上に放り出していたジャケットをスエットの上に引っかけた部屋を出た。

マンションの1階にはコンビニが入っている。モノが消えたときには、けっこう重宝している。見あたらなくなったからといって、すぐに新しいものを買ってしまうのがイケないんだなんて、考えたことはない。消えるのはいくらでも代用がきくものばかりなのだ。だから別に気に留めたりはしていない。原因は机のまわりや部屋が片づいていないことの方が大きい。DVDを見ようかと思つて、リモコンが無いやとなることなんかよくあるクチだ。そういうときはリビングのテーブルまわりに散らかっている雑誌やチ

ラシの類をどかしてみる。するとその下から出てきてくれる（出てこないこともあるけど、そのときは見るのをヤメる）。ペーパーナイフだって、印肉だって、部屋の大掃除すると、きつと二つも三つも出てくるに決まっている。実際、会社ではあれがない、これがないと言つてイライラするようなことはない。人目につく部分だけは退社時に一通り整理するようにしているからだ。会社では起こらないのに、自分の部屋ではよくあるというのなら、その違いに原因があると考えるのが当たり前だ。形だけとはいえ、会社では整理をしているのに対して、マンションの机まわりはそうなっていない、だからよくモノが消える。

多佳子の中では、とおの昔に結論ができていた。

真夜中のコンビニは冷たい場所だ。2

時間か3時間、もう少し早かったら、空気が違って感じられる。店の前にタムロしている連中もいるし、勤め帰りにその晩の食事を買っているサラリーマン風のおジサンもいる。雑誌を立ち読みしているアンチャンの背中も、こころなしか暖かい。でも、日付が変わってそうした人々がいなくなったら、一つの波が過ぎた後の静けさに覆われてしまう。同じ場所なのに、時間帯が変わるだけに、こんなに違うものかと思議なくらいにひんやりとしている。客が少ないだけではない。バイト君の顔つきも、退屈そうにし

か見えない。切り替えスイッチみたいなものがあるのだとすれば、店の中の空気、バイト君のしぐさ、そんな全部を省エネ仕様にしてしまっているのだろう。

その夜もまた空気は寒々としたものだった。客はおらず、レジカウンターの向こう側で腰を下ろしていたバイト君がニョッキと頭をつきだして多佳子の姿を確かめただけだった。多佳子もペーパーナイフだけ買って、すぐに部屋に戻ればよかつたが、気が付くと雑誌コーナーの前に立っていた。

コンビニに入ると、いつも雑誌コーナーへ行ってしまう。用がなくてもそうなる。パラパラめくってみるだけでもレイアウトデザインのアイデアが刺激されるからだなんて、後付けの言い訳だ。そんなこと言うまえに、とにかく足が向いてしまふんだから仕方ない。習慣なんだろう(条件反射かも知れない)。今日だって帰宅する際に立ち寄っているから、並んでいる雑誌はあらかじめチェック済みだ。それなのに、また来てしまった。それでもって意味もなくパラパラやっている。

ハツと目がとまるデザインはなかった。目新しい情報もない。店内では新発売の商品かなにかをPRするアナウンスが元氣よく流れられている。誰も聞いていないのがわかっていただけに、その元氣さがかえってさらさらしい。アナウンスに耳を傾げるでもなく、雑誌の記事を読むでもなく、多佳子は何冊かパラパラやっていた。そうして、変わり映えしないな

あ、そうつぶやいてからレジに向かった。

え？、なに？

部屋に戻ったとき、多佳子の目に見えないモノが飛び込んできた。部屋の灯りは点けたままで。それは、光が届いていないベランダの暗がりだった。明るいとこからでは姿がよく確認できなかった。しかし、暗闇の中に浮かんだ二つの光が、なにか動物らしきモノがそこにいることを教えていた。多佳子と同じように、ベランダのそれも凍り付いたように見えたが、次の瞬間には視界から消えた。

暗がりからこちらに向けられていた二つの光、それが身を翻して消えるときに視界に残ったふさふさしたハタキ条のもの(きつとシツポだ)、それだけが記憶に残っている。あとは、いつもと変わらない自分の部屋である。ノラネコかなと考えてみた。けれどもマンション4階にある部屋なのでネコが入りこんでくるとは思えない。それに、どう思い返してみても、あれはネコのシツポなんかじゃない。ベランダに出てみたが、暗すぎて分からない。多佳子は部屋に戻って、机の引き出しを開けた。そこにはLEDのハンデライトが入っている……はずだった。

あれ？

そうなのだ。モノが消えるのは、いつもこういうタイミングなのだ。数日前に

使ったのだけ見あたらない。また使ったきりで放りだしてしまっただろう。きつとリビングのどこか、雑誌の下にでも隠れているに違いない。

押入の中には、旧式で大きな懐中電灯が入っているのは知っている。でも、それをひっぱりだしてくるのも億劫だった。どうでもいいや、見なかったことにしよう、そう多佳子は考えた。

万紗子が失踪したらしい。出勤すると霧囲気が妙にピリピリしていた。何だろうと思っていたが、そういうことだった。チーフ宛にメールが届いていて、「やめます、お世話になりました」と書かれていたというのだ。チーフも最初は冗談と思っていたらしいが、始業時間になっても出勤してこないから自宅に電話を入れてみると、母親がでて、昨晚から戻っていないと慌てているのだという。

断るに断れない方面から頼まれて机をあてがっていただけとはいえず、一応は社員待遇になっている。いなくなつたことに重点を置くなら、本気で心配しなければいけないところだ。でも万紗子の場合にはちよつと事情が違う。とにかく手に負えないくらいのお天気屋なのだ。どうせ、ちよつとした気まぐれで飛び出ただけなんだろう。お腹が減ったら帰ってくるんじゃないの、その程度に思っておいてもいいのではないか。

あるいは、辞めますという内容をメールで伝えてきたという点に重点を置いたなら、まったくの笑い話だ。どうでもいい書類の整理とか、お使いとかなら、多佳子も時々、任せてはいた。けれどもその程度のことですえきちゃんとやってくれるかどうか心配だった。責任のある仕事などはとても任せられたものではない。それでも曲がりなりにも社会人だ。仕事を辞めるといふのなら、それ相應のやり方がある。イヤになつたからという、単純にしてバカバカしい理由だつたとしても、しかるべき形を整えるのが社会人だ。それを、大学のサークルをやめるみたいに、メール1本で済ませようとしているんだから、笑つてあげるしかない。きつと「辞表」なんて漢字は、書き取りのテストでも書いたことがないのだろう。

自宅の方では、娘がいなくなつて慌てているのだろうが、チーフはメールで辞めると言つてきたことに苛つているようだ。多佳子の場合には、どちらでもなかった。同じ職場で机を並べていた人間が消えたのなら、普通はポーズだけでも心配する素振りをするところだ。でも消えたのが万紗子なのだから、心配するだけ無駄と思えた。メールの件についても、なるほど万紗子らしいと言うよりなかつた。

「ヤバイオトコに騙されてついて行っちゃったんじゃないの」

「かもね、あの子、最近、新しい彼氏が

どうのこうの言ってたもんね」

「マサコの言ってた彼氏って、そのスジのヒトなの？」

「ねえ、だったら、メールも怪しいんじゃない？ よくあるじゃない、メール送ったのは犯人だったっていうの」

「やだ、犯人って何よ、もう事件にしてるの？ 殺されちゃってるわけ？」

「あつ、そうか、じゃあさ、モデルにしてあげるとか言われて、あっち系のプロダクションに連れていかれたっていうのはどうかな」

万紗子の件は、その日のうちに他の部署でも噂の種になっていた。多佳子が立ち寄ったとき、給湯室では、若いOLたちがキャツキャツと楽しそうにおしゃべりをしていた。そして多佳子の姿を認めると、バツが悪そうに会釈して口をつぐんだ。

そっちの方が面白いんだろうな、と多佳子は考えた。いきなり辞めてしまうのも、それをメールで告げるのも非常に決まっている。しかし多佳子には、そういうのも万紗子らしいとしか思えなかった。だから若い女の子たちが盛り上がっている方向は少しも考えていなかった。

（アンタたち、週刊誌の読み過ぎなんじゃない、アタマ腐ってるよ。）少しくらいの軽口は挟んでみたかった。でもそんな言葉が口を衝いて出てくるより先に、そくそくと立ち去られるとなにもできない。いつものことだ。露骨に避けられてい

るわけではないのはわかっている。でも最初の一言が出てくるのに、他人よりほんのちよつとだけ時間がかかる。そのわずかな遅れが重たい空気になって相手に伝わってしまう。言葉の準備が整ったころには、もう相手はいない。

多佳子はコーヒーマーバーからお湯だけをカップに注いだ。そして少し冷ましてから唇を湿らしてみた。

「ああ、いい、うう……」

声が出ないわけではない。そんなことはわかっている。ミーティングで発言しなければならぬときには、きちんと喋っている。雑誌の広告で、担当者としてクライアントにデザインコンセプトの説明するときだって大丈夫だ。あらかじめ準備され、きちんと整理されている言葉ならすぐに出てくる。でも、それとは違う。もっと簡単な、単純な、その場だけの言葉はいつも一歩遅れる。頭の中では会話が進んでいるのに、実際の言葉が出てこない。内気で控えめな女の子でいられたころなら、まだよかった。でももうそんな年でもない。気が付くと、いつの間にか、高いバリケードの内側でひとりつきりでぼつねんとしていた。

席に戻ると、チーフの姿が見あたらない。ミーティングの時間なのに、万紗子のことなのだろうか。本人を心配しているというよりも、彼女を押しこんできた

相手（大切な取引先だ）との関係があるから、幹部のところへ報告に行ったのだろう。ことはちよつと面倒な方向へ進んでいるのかも知れない。だとするとミーティングはお流れになるはずだ。多佳子がそんなことを考えていると、隣の席の女の子が、申し訳なさそうな小声でささやいてきた。

「あの……、資料は机の上へ置いておいてくれと、チーフが、……」

（そんなに恐縮して言うようなことでもないでしょ、普通のメッセージなんだから）。頭の中だけでそう返しておいて、多佳子は黙つてうなづいた。そして午前中に出力しておいたデザイン案をファイルケースから取りだしてみた。手描きのラフは三日前のミーティングで目を通してもらっている。それを改めてコンピューターで作成してきただけのものだ。他に頭が行っている、チーフは真剣に検討したりはしないだろう。他のスタッフだって、多佳子の出すデザイン案に口を挟んだりしない。「エグゼクティブデザイン」なんて仰々しい肩書きが名刺についているからだ。だったらミーティングなんかしても同じじゃない。あとはライターが書いてきた記事をはめ込んでお終い。このまま印刷所にまわされてカラーカンブになって出来上がり。

悪い出来だと思っっているわけではない。

でもなんか陳腐だといった思いは残っている。このままで雑誌の見開きになっていてもおかしくはない。でも手を加えられることなく通つてしまうと、どうでもいい仕事なのかなとも思えてくる。エグゼクティブかなんか知らないが、結局はだれがやっても同じようなものにならぬ仕事ばかりなのだ。美大にいて、広告業界を志望していたころには、時代を映しだす広告を作ってみたくなんて、大きな夢もあった。世の中の空気を切りとったキャッチコピーというと、その言葉ばかりが目されがちだが、それを効果的に印象づけるレイアウトなり、タイポグラフィなどのデザインがなくては始まらない。むしろ、そうしたデザインこそがコピーを生かす力の源なのだ。学生コンペで表彰されたときには、そんなことも思っていた。業界のトップランナーになつて事務所を構えている姿も空想していた。しかしそれも昔の話だ。希望どおりデザイン系の会社に入ることはできなかった。でもスポットライトの中心とは縁のない仕事ばかりの日々が続いた。入社したところと肩書きは変わっても、与えられた作業を事務的に片づけるのは変わらない。以前ならいろいろ意見がもらえるように複数のデザイン案を出してみたり、疑問点を見つけて書きつけたこともあった。でも期待していた反応は返ってこなかった。最近はそのことをする熱意もない。機械が規格品をペッペッと吐き出すように処理していくのが求められてい

るすべてだった。

PM8時。いつもと変わらない時間にマンションに帰り着いた。そしていつものようにコンビニでの買物を済ませ、これもまたいつもそうしているように、ポストに押しこまれていたチラシを廊下のゴミ箱に捨ててからエレベータに乗った。

ふう

多佳子は小さくため息をついた。のろのろと移動する表示板の数字を見つめながら、今日もなんにもない一日だったなあと考えた。4階について扉が開くまで万紗子のはまったく頭から消えていた。それでも扉が開いたのが、なにかの弾みにでもなったのかのように、万紗子の名前がひらめいた。

(ああ、そういえば万紗子がいなくなっただけだ。家族にすれば、とんでもない出来事なのに決まっている。チーフは管理責任が問われかねないから慌てているのだろう。他の部署の女の子たちには、おしゃべりにちょうどいいオモチャだ。それじゃ、私の場合はどうなんだろう。家族や彼氏といった親しさはないし、チーフのように立場上の問題があるわけでもない。でも同じフロアで机を並べたのだから、面識もあれば会話(必要最低限のことだけだったけど)も交わしたことがあった。他人以上友だち以下ってところだ。なのに、どこかとても遠いと

ころでの出来事のようにしか思えない。多佳子さんは冷たいよ、誰かがそんなことを言ってくれたら違ったかも知れない。でもそんな人もいない。

(冷たくないよ。だって、こんなにも考えてるんだから)。エレベータを下りて、廊下の角を曲がるまでの五六メートルほど歩く間、確かに万紗子のことを考えていた。多佳子は、頭の中で会話を組み立ててみた。タカちゃんって冷たいんだね。今度はちよつと親しげなヤツがそう言ったような気がした。(だから言ってるじゃない、冷たくないよ)。多佳子、お前クルに出来てるなあ。男の声だ。男から名前と呼ばれたことなど、もう忘れてしまいうくらい昔の話だ。ふん、多佳子は鼻であしらうように、その声を無視した。

あつ

廊下の角を曲がったところで、多佳子はその姿を認めた。ちよつと多佳子の部屋の前あたり、首を後ろに向けて多佳子の歩いてくる方を見ていた小動物は、多佳子と視線が合うと走って逃げ出した。この前のとくと同じように、ふさふさしたハタキのようなシツポが確認できた。それだけではない。廊下の灯りがその姿をはっきりと照らしていた。胴長で白っぽい毛色(そう見えた)のそれに対して、ほとんど直感に近いかたちで「イタチ」という言葉が頭を過ぎった。

部屋に駆け込んでコンビニ袋を放り出す。押入を乱暴を開けて懐中電灯を取り出す。電池がなくなっていないことを確認する。そうして、ふたたび廊下に出て、それが逃げていった方向へ行った。廊下の灯りが届いていない暗がりをあちらこちら照らしてみたり、非常階段の踊り場に出て中庭の方向も照らしてみた。なにもいない。

アタリマエか

相手は疾走していった動物である。押入から懐中電灯を取りだして電池の確認をするのを待っていてくれるはずはない。それでもしばらくは方々を照らしてみた。やっぱりなにもいない。わかりきっていることだ。

多佳子はいないのがわかってる相手を探すことをあきらめた。部屋に戻ると、ドアを開けてすぐの廊下にはコンビニ袋から飛び出したスナック菓子やパックの牛乳が散らばっていた。多佳子はそれらを拾い上げた。ものすごく慌てていたみたいだ。自分でも可笑しくなる。

どうしてなんだろう？

なんだったんだろう、ではない。一瞬、頭を過ぎった「イタチ」という言葉。そちらの方に意識は向いていた。「イタチ」という言葉がひらめいたのは間違いない。でも多佳子には、イタチを意識して眺め

た記憶はなかった。生まれてこのかた、身近なところにイタチがいた時間などなかったはずだ。「イタチ」という言葉は知っていても、それがどういう形をした動物なのか説明してみると言われると、しどろもどろになる。その程度の知識しかないのに、どうしてイタチだなんて思ったのだろう。

コト

枕元でなにかが倒れたようだ。神経がたかぶっていたのか、多佳子はその小さな音で目を覚ました。夢を見ていたらしい。夢を見ていたのだとわかるまで、しばらく時間を要した。それでも次第に意識の焦点が定まってくると、ため息が一つこぼれた。首のまわりや脇の下が汗でじっとりしていた。後味の悪い夢だったようだ。

「一人いなくなつて忙しくなると思うけど、みんなで協力して頑張ろう」

夢の中でチーフが言った言葉だ。多佳子の記憶に残っているのはこれだけだった。ほかに、なにかつかみどころのないもやもやしたモノがある。でもそれはよくわからない。布団に入ったまま、多佳子は残された断片の組み立てにかかった。おそらくミーティングの中での言葉だ。

セリフの前にどんなストーリーがあったのかは思い出せない。でもきつと万紗子の話だったに違いない。それにしても、チーフの口調は誰かの寿退社をうけて言っているようで、万紗子がいなくなったのをなんの不思議とも思っていないように聞こえた。他の人たちもみんな同じように考えているようだった。

人ひとりいなくなるなんて、実はありふれたことだったんだ、なにも自分だけが冷たいだなんて言われる筋合いのものなんかじゃないんだ、いや、そうじゃない、夢の話だから勝手に都合にいいように書き換えているだけなんだ……

いま何時なんだろう……あれ？

起きあがって時計の方を見ようとしたとき、多佳子は身体が動かなくなっているのに気が付いた。起きあがろうとすれぼするほど、強く締め付けられている。ホラー系のテレビ番組などでよく言われる金縛りについては、多佳子は何度も経験していた。疲れて帰ってきて、ベッドに倒れ込むように眠ったときなどによく起きる。あれはホラーでもなんでもなくて、中途半端に頭の方だけが覚めて、隅々の神経が眠ったままになっているからそうなるのだということも知っていた。だから怖いと思ったこともない。でも、このときは、いつものとは違っていた。身体がこわばって動かないというのではない。他からの力で押さえつけられている

ような感じなのである。多佳子が知っている金縛りなら、意識の方も朦朧としていて、またかと思ったり思っただけだが、今はなにか引きつった顔の自分が見えている。覚めている、もう覚めているって。頭の中でそんなことを叫んでいる。

コトン

枕元でなにかが倒れた。ジリジリとした焦りの感覚が大きくなっていく。枕元になにかいる。でも見ることもさえない。まったく動けないのだ。イタチだ。直感がそうささやいた。数時間前に仕入れたばかりの情報がよみがえってきた。逃げていった小動物に対して、とっさにイタチだと反応してしまったのが気になって、ウェブサイトをいくつかまわってイタチ関連の情報をチェックしたばかりだった。その結果、生物学的な知識の整理もできたし、数点の画像から具体的な姿もイメージできるようになった。最近ではペットとして飼われていることも知った（もしかすると近所に飼っている家があって、そこから逃げてきたヤツなのかも知れない）。「イタチ」という言葉で検索をかけて、ヒットしたページをランダムに読んでいたのだが、中には年をとったイタチが妖怪になるとかの話を紹介しているサイトもあった。

多佳子の頭の中を、そうした情報が入り乱れて過ぎていく。枕元にいるのはあの逃げていったイタチだ。とあるペー

ジに、土手のようなところに前足を置いて立ち上がったように見える写真があった。いま枕元にいるのは、それと同じような姿勢で、床から立ち上がって頭をつきだしているイタチに違いない。ベッドの端に前足を乗せて、じつとこっちの顔をのぞきこんでいるんだ。

見ることのできない枕元の様子が形をもち始める。なにも見えない暗闇に対して、少しずつ目が慣れてくるような感じだ。銀色にも見える毛色、ほんのりと湿ってツヤを帯びた鼻先、黒く吸い込まれそうな眼球……、いや、イタチにしては大きすぎる。イタチはそんなに大きいはずがない。でも、そこにいるのはイタチでなくつちやいけなんだ。深夜のコンビニでレジカウウンターの奥からバイト君が頭をつきだして、店に入ってきた多佳子の姿を確認する光景がオーバーラップした。同時に、見えないはずのイタチの顔が人間の輪郭を持ち始めた。膝のあたりから太股の内側へなにかがはい上がってくる。鳥肌が立つ。多佳子、お前クルに出来るなあ。どこかで声が聞こえた。一瞬、視界が真っ白になった。そしてすべてが消えた。

コトン

枕元で聞こえた音に反応して多佳子は目を開け、ゆっくり起きあがった。夜はまだ明けていなかった。液晶の表示が示す時刻は4時7分になっている。枕元で



はLEDのハンディライトが倒れていた。こんなところに放り出していったんだけ、そう思いつつ、多佳子はライトを点けてみた。白い光の中に見えたのは、いつもと変わらない多佳子の部屋である。なんにも変わっていない。自分もここにいた。多佳子の目から涙がこぼれた。消えなかったんだ……あのまま自分も消えてしまったらよかったのに、そう本当に思っていた。

メールなんか出したりしないから正真正銘の蒸発だ、そうなったらみんなが騒いでくれる、そんな様子を、どこか遠いところから眺めてみるのも悪くない。

多佳子は夢のストーリーを考えながら、ハンディライトが照らしだす壁をじつと眺めていた。灰色の壁はだれもいないステージにあてられたスポットライトにも見えた。(了)

もうすぐ立春

あけましておめでとうございます。本年も変わらぬご愛読よろしくお願ひ申しあげます。

一年のうちで一番底冷えが厳しい季節を迎えて春を待ちわびる時期となりました。

お正月から氏神様参り、初恵比寿の日を迎えて七福神めぐり、立春と暦が巡っていく中で、少しずつ春の気配を感じます。

立春の前日が「節分」、文字通り春へと季節が変わります。高槻へ来てからでも節分の豆をと義母から教えられて炒った豆を神棚に供えて、主人が「よしっ、まこうか」大きな声で「鬼は外、福は内」と何度も豆を握り、力一杯まきました。台所から居間へと、豆を投げると、ばらばらとはねて飛んでゆき、それを自分の年の数だけ拾って、鬼が逃げていくさまを思い浮かべて終了。なつかしい思い出です。

まいた豆があちこちに賑やかに転がっていました。その日の夕ご飯は必ず鯛です。家の中には、鯛の匂いと煙でいっぱい。

子供にとっては好物とは言えないおかずでしたが、「これは縁起物だから」と言われて食べていました。義父は美味しそうにして一杯の酒を楽しんでいた

ましたネ。

残った鯛の頭をヒイラギの枝にさして魔除けのために門口に立てると、さすがに鬼もびつくりして逃げ出すぞ、と思うほど痛々しく見えたものです。

家族それぞれが年の数より一つ多い豆を食べます。節分の夜は、言葉通り

「福は内、鬼は外」を感じる事が出来るひと時でした。また一年後の節分が楽しみになったものです。

新しい年が皆様にとりまして福が多い年でありますように心からお祈り申しあげます。

老いてまだ

恋しきもののひとつあり

餅好きの夫居ればこそ

俳句

土田裕

千年の濠の濁りや初参賀

ぬくもりは金釘にこそ年賀状

積読の一書抜き出し読み始め

信号の赤もめでたき初詣

二人して常と変はらぬ松の内

編集後記

新春のお喜びを申し上げます。皆様のご支援のおかげで、「芥川だより」も10年目を迎えることが出来ました。当初は2年間、24号で廃刊にする予定でしたが、皆さんの励ましでこれまで続けられました。

身近な人の生き様が如何に面白いのか。世の中で一番おもしろいのは人である。創刊号の辞で書きました事は、今も変わらぬ編集方針です。

いくら時代が変わろうと、心の揺れ動きの喜怒哀楽は尽きません。ありふれたように見える人の生活の中に人生を楽しむ秘密が潜んでいます。

「芥川だより」は、主義主張にとらわれない自由な紙面を心がけております。

予算の都合で紙面には限りがありますが、今後とも投稿文を大事にして掲載していきたいと思っておりますので協力をお願いします。

今年もよろしくお願ひ申し上げます。

(嘉)

